

---

**彼女のために僕ができること**

is

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

彼女のために僕ができること

### 【Nコード】

N9061Y

### 【作者名】

is

### 【あらすじ】

藤木利央は平凡な人生を目指す人間だった。

ある日彼は平凡な人生を捨てることを決意した。

それは彼にとってほんのちょっとした冒険のはずだったのに…。

気付くとなぜか異世界にいて、ほんの少しのつもりだった冒険は本当の冒険になった。

平凡を望んでいた高校生が異世界で平凡でない人生を送る話です

(予定)

思いつきで書いていきますし、生まれて初めて書く作品です。  
それでもよければ是非お付き合いです。では。

## 彼にとって世の中は

世の中で生きていくということは、細い道の上を歩くようなものだ。彼は考えていた。道の両側は底の見えない崖。

学校に通い勉強をし、社会に出て働く。結婚をして子供を得、育て、老後を迎え死に至る。彼にとって細い道の上を歩くということはそういうことを指していた。いわゆる誰もが描く平凡な人生。

道を踏み外すことは崖から落ちる、つまり彼の人生においての転落を意味していた。いじめに遭う、犯罪を犯す。満足な収入を得られない、幸せな家庭を築けない。およそ彼にとって平凡に感じられない出来事は全て崖から落ちることと同義だった。

いかにして道を踏み外さないか、彼にとってはそれが生きていく上で最も大切なことだった。

しかし一方で、それを窮屈に感じる時もあった。

決まりきった人生を過ごすことに何の意味があるのか、そんな風に思ったりもした。だがその度にこの国で生きていくということ、法律・学校・会社など社会を形作る全てのものは道を踏み外さないためにあるのだと考えた。

平凡な人生を送る道が国によって用意されているのに、わざわざ道から逸れる、それは愚者の行為だと自分に言い聞かせた。

そんな彼の前に今、はつきりと道が現れていた。彼が頭の中で考えていた細い道、両側には底の見えない崖。それがまさに空想ではなく、現実として彼の目の前に存在していた。

彼にとって世の中は（後書き）

はじめてしまった。

いつまでどこまで続くかわかりませんが、  
なまあたたかいめでみまもってください

その日は……

藤木利央にとってその日は散々な一日だった。

朝、目を覚ますと嫌な予感が瞬時によぎった。

時計に目をやる。時刻はすでに一限目の授業が始まる時間だった。慌てて飛び起き、学校に行く準備を整え、朝食をとるためリビングに向かった。せめてお茶漬けか、シリアルだけでも摂ってから学校に向かおうと思ったのだ。

そこで彼は会いたくない人物に出会ってしまった。彼の描く平凡な人生を邪魔する存在。

母親。

「あら、お早う。いえ、おそ（遅）ようかしら。こんな時間に起きてくるなんて良い身分ね。誰の稼いだお金で学校に通えているのか、是非教えて欲しいわ。」

全く笑えないギャグと嫌味を言われた。その息はとても酒臭かった。

「わかってるよ、母さん。あなたの労働は無駄にしない。しっかりと勉強してくるよ。」

関わりたくない一心でそう言い捨て、玄関へ向かった。

「大体、あなたが高校へ行くのも私は反対だったのよ。もう働ける歳なんだからさっさと就職して私の面倒を見て欲しかったのに。大体あなたは……。」

母親の愚痴にも似た説教を背に玄関を出た。

これが藤木利央の母親だった。

彼がまだ幼かったころ夫と別れ、女手一つで彼を育ててきた。そう言つと聞こえは良い。しかし、実際は、夫に逃げられ仕方なく利央を育てたのだ。だが、育ててもらったという実感は彼にはない。

ただ近くにいる人。それが正直な彼の思いだった。

学校に通わせてくれたことには感謝していた。しかしそれも近所の目が会ったからだ。いわゆる世間体のため。食事も与えられず、幼い頃の利央は空腹で何度か死にそうな目に遭っていた。それでも死なずに済んでいるのは近所の人たちの助けがあったからだ。

毎日振るわれる暴力。あなたがいなければというお決まりの言葉。そんな人間を誰が母親だと感じるのか。いや母親を感じる感じないということ自体がおかしな話だった。母親とはそうとを感じるものではなく自然とそうなるものだからだ。

藤木利央にとっては実の母親よりも、自分を助け、面倒をみてくれた近所の人たちこそ、親と呼ぶべき存在だった。

すでに授業は始まっていたが、教室の後ろの扉から中に入った。

「すいません。遅れました。」謝罪の言葉を述べ、利央は席に座る。黒板に向かっていた教師が彼に少し目をやったが、特に何を言うわけでもなく授業を進めた。

「どうしたの。利央が遅刻なんて珍しいじゃない。」

彼の席の前に座る女の子、葛城ゆずはが小声で話しかけてきた。

「うん。寝坊してね。ちよつと疲れてるのかもしれない。」

当たり前障りの無い言葉を返す。

「ふーん。まあ良いわ。そんなことより今日のお昼付き合ってくれない？」

「新作？」

自分から話しかけてきたくせにそんなことよりとはどういうことだと思いつながらも尋ねた。

「そんなところ。楽しみにしててね。」

少し顔を赤らめて笑顔でそう言い彼女はまた授業に戻る。

（新作か。楽しみだな。）

少しにやけた表情を浮かべた。

ゆずはは葛城家の人間は利央の面倒をみるのが当然だともいうようにこうして時折、試食と称して彼に弁当を与えた。彼女は弁当だけでなく、他にもあれやこれやと利央の世話をやいていた。

葛城ゆずはは彼がまだ幼少のころ一番面倒を見てくれた近所の人娘だ。利央とゆずはの関係はいわゆる幼馴染と言える。ゆずはの両親は利央に夕食を与え、風呂に入れ、時には家に泊めた。彼にとつて感謝してもしきれない存在だ。

ゆずははそうして面倒をみてくれる葛城家に頻繁に通う内に仲良くなった。

彼の思い描く人生に彼のパートナーとしてゆずはが隣にいるのは彼だけの秘密だ。自分の思いをゆずはに打ち明けてもいない。自分の境遇のことを思うと彼女に思いを打ち明けることはとても大それたことのように感じられたのだ。

利央としては彼女が自分にしてくれる行為の中に、一欠けらだけでも自分への好意があればよいのにと願わずにはいられなかった。

放課後、教師に頼まれた用事をすませ教室に戻る廊下を一人歩いていた。すでにほとんどの生徒が帰宅するか、部活にでており、誰も廊下を歩いていない。グラウンドからは部活に励む生徒の音がすかに聞こえた。

利央が教室の扉の前に立つ。

すると中から女子生徒たちの声が聞こえた。

「……っから本当はどう思ってるのよ。」

「そうそう。わざわざお弁当を作るなんて好きじゃないとできないよ。もうすでに付き合ってるんじゃないの。」

そんな会話が漏れ聞こえた。誰かをからかうような声だった。

これは教室に入るに入れないと苦笑しながら、さてどうするかと利央は考える。そんな時だ。

「利央とはそんな関係じゃないの。」

ゆずはの声が聞こえた。利央は思わず聞き耳を立ててしまう。

「利央は小さい頃から一緒だから、私の彼氏とかそんなんじゃない。でもね、私は利央のことを好きとか正直よくわからないし。そして、私は利央のこと…」

「そうよね。彼って家が貧乏だって話だし。皆に対する態度もそっけないもんね。当たり障りのない会話しかしないし、全然面白くないもの。そんな人を好きになつたりしないよね。」

ゆずはの言葉に割り込んで別の女子生徒が利央の評価を述べた。そして、複数の笑い声が聞こえる。

利央は心臓の鼓動が早くなるのを感じた。

女子生徒の評価は気にしていなかった。彼女の評価は利央が意識してそうしてきたからだ。これも彼の平凡な人生を送るための計画。当たり障りの無い会話をするのは、人と深く関わりたくないという思いの現れだった。かと言って孤立してしまつては意味がない。孤立はいじめの標的にされやすいからだ。だから、彼は適度に周りの人間と接するようにしてきたのだ。

ただ、ゆずはの言葉に衝撃を受けた。

< 利央とはそんな関係じゃない >

< 利央のことを好きとか正直わからない >

世界が足元から音を立てて崩れていくような気がした。

彼女の言葉は密かに彼女に好意を抱いていた利央の心を打ち砕くには十分だった。

利央は教室の扉を開け放つ。

彼を見て驚きの表情になる女子生徒達。

ゆずはの顔は見れなかった。

まるで時が止まったかのように、瞬間瞬間の場面が利央の目に映る。

彼は自分の席から鞆をとると逃げるようにして教室から出て行った。

「利央待つて！」

ゆずはの声が聞こえた気がした。

## そして道を踏み外す

(ゆずはのこと好きだったんだな。)

彼は改めて思った。

臆気ながらに考えていたゆずはとの未来像。他愛ない想像でしかないと考えていた。

だからこそ彼はこんなにも動揺している自分に衝撃を受けていた。  
(本気だったんだ。)自分の思いを確認する。思っていた以上にゆずはのことが好きだった自分に気付く。

(でも、もう遅い。終わったんだ。この思いは。)  
急に何もかも嫌になった。

家に帰ると母親がいる。今までの自分の境遇。平凡に生きようと努力していた自分。愚かにもゆずはに思いを寄せていた自分。本当に何もかもが嫌になった。

そんな彼の前に道は現れた。

細い道。両側には底の見えない崖。利央にとっての平凡な人生の象徴が想像ではなく確かに目の前に存在していた。

(なんだこれは。こんなにはつきりと想像したのは初めてだ。)  
あまりにも唐突な出来事に利央はそれを現実のものとは認識できなかった。いつもの想像だと考えた。

だからこそ思った。

道を踏み外そうと。

もう平凡な人生を歩くことは意味がないことに思えた。時折感じた窮屈さを強烈に感じた。今さら生き方を変えられるとは思わなかったが、せめて想像の中だけでも。今まで想像の中でも決して踏み

外さなかつた道を踏み外そうと思った。

利央は決意し前に進んだ。細い道の上に立つ。そしてゆっくりと崖に向けて足を踏み出した。それは今までの現実との決別。少なくとも利央はそう決意するための儀式としての行為と考えていた。

（別に死ぬ訳じゃない。これは想像なんだから。）

「利央。何しているの！」

まさに一步を踏み出そうとした利央に驚きの声がかげられた。

「ゆずは！」

彼女は一体何を驚いているのだろうと思いつつながら彼は一步を踏み出し、崖底へ落ちて行く。

「利央！」

利央の目に身を乗り出し叫ぶゆずはの姿が映る。

そして、利央を追って飛び降りてきたゆずはの姿が目映った。

（何だこれ。彼女のことを振り切るつもりだったのに。全く未練がましいな僕は。）

そんなことを考えたのを最後に利央の意識は途絶えた。

そして道を踏み外す（後書き）

とりあえずここまででひとくぎり  
おつかねさまでした

## 彼女との出会い

さらさらと水が流れる音で利央は目を覚ました。朦朧とした意識の中でいつの間にも眠ってしまったのだらうと考える。

徐々に覚醒する意識の中で、目を覚ます前の自分について思い出した。

（そうだ。眠っている訳ないじゃないか。家にも帰っていない。帰宅途中で想像の世界に身を躍らせていただけじゃないか。）

しかし、妙に晴れ晴れとした気分だった。自分の殻を打ち破った気持ちだった。さあ今から新しい人生のスタートだ。そう自分に言い聞かせ、大きく息を吸い込みぐつと背を伸ばした。

ふと、周りの景色がおかしなことに気付く。

見上げた空は夕方であるはずなのに、青々とし、まるで正午のような明るさ。太陽の位置も高い。周りを見渡せば、近くに小川が流れ、その先には森が広がっていた。

「どこだ。ここは。」思わず呟く。

こんな景色に心当たりはなかった。少なくとも通学路にはこんな景色はなかった。

先ほどまでの晴れ晴れとした気持ちは消え去り、徐々に不安が心を占めていく。自分はどこににいるのか、気を失っていると思われる時間に一体なにがあったのか。意識が途切れていた時間に恐怖を感じた。自分はまだ想像の世界にいるのか、そんな気さえした。

「誰だ。お前は。こんなところで何をしている！」

突然利央を問い質す声が聞こえた。

声のした方、森へ目を向けると、一人の女性が立っていた。彼女は弓を構えて利央を睨みつけていた。

「誰だと聞いている！お前は言葉が分からないのか？」

重ねて聞かれ、利央は慌てて答えた。

「利央。僕は藤木利央だ！」

「フジキリオウ？変った名だな。では、聞く。お前はここで何をしていた？」

それは自分が聞きたいと利央は思った。

「僕がここで何をしていたかは僕も知りたい。気が付いたらここにいたんだ。よければここがどこだか教えてもらいたい。」

「ふざけるな。そんな訳の分からない話があるか！もしやお主、気がふれておるのか？」

馬鹿なことを言わないで欲しいと彼女に近づこうとすると、足元の地面に矢が刺さる。そういえば彼女は弓を構えていたと思い出す。「悪いが動かないでもらおう。」

そう言いながら新たな矢をつがえ、彼女は利央に近づいてきた。

「そのまま動くな。」力がこもった声で素晴らしい、彼女は弓をゆっくりと下ろす。

助かったのか、そう思った利央に対して、彼女は腰に下げている縄で利央の手首を後手に縛った。

利央は何をするんだと思ったが、全く状況が分からない現状では流れに身を任せるしかないと考えた。

「このままお前を本陣に連れて行く。詳しい話はそこで聞こう。フジキリオウ。」

こうして利央は連れ去られた。

## 彼の選択 彼女の思惑

赤色の髪が腰まで伸びており、首の辺りで一括りしてある。瞳の色は同じく赤。肌の色は血管が浮き出そうなほど白く、身長は低い。銀の甲冑を身に着けているのでよく分からないが、体つきは華奢に見えた。

( 同い年ぐらいかな。 )

それが利央を連れ去った彼女の印象だった。

今、彼は彼女に連れてこられた天幕の中にいた。

利央は後手に縛られたまま円卓に座らされ、目の前には彼女が座っていた。彼女の左側にはフードを被った人物がおり、右側には彼女と同じく銀の甲冑に身を包んだ中年男性が座っていた。

「…では、こいつはあの賊どもの仲間ではないというのだな。」

「ええ、姫様。彼は…、フジキリオウと申しましたかな。フジキリオウは賊とは一切関係ありませんまい。私が見ますに、彼は生まれたての赤子じゃ。この世のことも一切知らぬ。不思議なことじゃが、あの姿のまま、この世に生を受けたとしか思えぬ。」フードを被った人物がそう告げた。その声は老婆のようにしわがれていた。

「これだから盲いた占い師のいうことはあてにならぬ。どう見ても青年にしか見えぬ男を生まれたての赤子とは。馬鹿馬鹿しくて話にもならぬ。」

彼女の右側の男性が声を荒げた。

「姫様。こんな老いぼれの戯言に耳を貸す必要はございません。今すぐ、彼奴を締め上げ、事の真偽を確かめましょう。」

それに対して、老婆は姫と呼ばれる彼女に何事かを耳打ちする。

彼女の吊り上った大きな瞳が一瞬さらに大きく開いた。

「オババ、それは真か！」声を上げた姫に老婆は小さく頷く。

「……フジキリオウの拘束を解き、私の預りとする。暫くは…、そうだな。私の身の回りの世話をしてもらおう。」

彼女は暫く考えた後、そう告げた。

その言葉に男は忌々しげな表情を浮かべたが、特に異論を述べようとはしなかった。

利央は全く状況がつかめなかったが、何やら身の危険を脱したらしいということは理解できた。

「さて、どうしようか。」

男は席を外し、姫と呼ばれる少女と老婆、そして、利央がその場に残っていた。

「お前、何ができる？」少女は利央にそう尋ねた。

「何ができると聞かれても……。」

利央は気がついてからずっと混乱している思考を整理しながら答える。

「出会った時も言いましたが、私はここがどこなのかも分かりません。一般的なことはできと思いますが、この状況を見ますに、私の知っている【一般的】なことがここでも果たして【一般的】なのか判断できません。」

とりあえず丁寧な話し方をした方が良さだろうと考えながら、利央は言った。

「ふむ。生まれたての赤子とはいうが、言葉は通じるし、考えることもできるか。」

では、世の中のことを知らない者に接するように説明してやるか。

「

そして彼女は話し始めた。

「今、お前はノキテイル帝国という国にいる。帝都の名前はフリックス。そしてここはその国の西方にあるフリミエールと呼ばれる村の近くだ。帝都からは馬で四日ほどかかる位置にある。」

王の名前はトイテ・フリックスという。ちなみに私はその娘でユニテルといい、上に三人の兄がいる。娘は私一人だ。

さてここまでで何か心当たりはあるか。」

彼女は話しを上手く飲み込めていない表情を浮かべる利央を見てさらに説明を続けた。

「では、今お前が置かれている状況について話しをしよう。

私は、フリミエールを度々襲う賊を討つためにここに来ている。

先ほどお前を捕捉したのは、お前を賊の仲間ではないかと考えたからだ。今もそうだが、この国にそんな怪しげな格好をした人間はいない。」

賊の仲間と間違えても仕方なかるう？と利央に目を向ける。

利央は学校帰りの服装、つまり制服を着ていた。

「結果、私はお前が賊の仲間ではないと判断し、こうして逐一丁寧に説明してやっている。

正直、何を説明すれば良いのか分からぬがな。

お前から何か聞きたいことはあるか？」

利央はユニテルの説明について、考えを巡らせた。

全く知らない国と土地の名前。しかも彼女自身は王女だという。

王女！今は一体何時代だと思った。

賊を討ちに来たというが、彼女が着込んだ甲冑姿をみると、中世あたりの様に思える。

（まあ、ここがどこで、いつの時代でとかはどうでも良いか。要はこれから自分はどうなるのか、いやどうするのが肝心か。）

平凡を目指した彼はそう考えた。

自分が置かれている状況全てに疑問を抱いていたが、彼は普段と変わらない考え方をした。

平凡な人生を送るために彼が実践してきたことの一つ、

<あらゆることに抗わない>

何かに抵抗することは、特別の行動を起こすこと、つまり普通から外れることだと彼は考えていた。

まずは流れに身をまかせよう。そして、こここの世界の平凡、当たり前を目指そう。彼はそう決心した。

「私から聞きたいことはございません。

先ほどの話では私は貴女の預かりになり、身の周りの世話をすることのこと。

何も分らない自分ではありませんが、精いっぱい務めたいと思います。」

こうして利央はユニテルの預かりとなった。

「オババ、奴をどう見る？」

兵士に利央を他の天幕へ連れて行かせた後、ユニテルは老婆に尋ねた。

「まあ、害はないじやろう。あの様な華奢な体格では剣も満足に振るえますまい。」

見た目もまるで女子のようじゃった。兵に与えれば大喜びするじやろうて。あれだけの美人はその辺の娼館にはおりますまい。」

「そういうことを聞いておるのではない。」  
「下品な笑い声を上げる老婆を軽く窘める。」

「私が聞いているのは、彼が本当に<竜憑き>かどうかだ。」

<フジキリオウは竜憑きじゃ。>

先ほど老婆はユニテルにそう耳打ちした。

だから彼女はあれほど驚き、自分の預かりとしたのだった。

「信じられぬのは無理からぬことじゃが、儂の占いではそうであらう。奴は竜憑きじゃと。」

奴を姫の預かりとしたのは正しい判断じゃと思えますぞ。

竜憑きを下手に扱うと何が起こるか分かりませぬゆえ。

また、あの場で奴が竜憑きであることを明かさなかつたのも良い判断じゃった。

あの場にはカミステルがおった。

姫様が竜憑きを手に入れたことを知れば、あやつらが何を仕出すか分かつたものじゃないですからな。」

「カミステルか。」

カミステルはユニテルが賊を討伐するにあたり、三人の兄から同行を命じられた人物だった。

ユニテルは彼を彼女の行動を逐一、兄たちに報告するために送りこまれた間諜だと考えていた。

兄たちに見てみれば、ここでユニテルがほんの僅かでも失敗を犯すことを期待しているのであろう。

彼女の出陣に際し、恩着せがましくカミステルを同行させた兄たちの行動はユニテルにとって片腹の痛い話だった。

「姫はこの討伐で大きな困難に遭いなさる。

じゃが、フジキリオウを拾ったことで、その困難をぐりぬけることができるじゃろうて。」

「大いなる光に出会う、か。ババの話では私の人生を大きく変える出会いになるとのことだったな。」

この度の討伐について老婆に占ってもらった内容だった。

ユニテルは大きな困難に出会うが、同時に大いなる光に出会う。

その光は彼女の人生を大きく変えるものだという。

「大いなる光だと思われるフジキリオウ、竜憑きとは出会った。

さて、大きな困難とは何であろうな。」ユニテルは老婆に問いかけた。

「さてそれは。ババの占いは万能ではありませんゆえ。」

老婆はそう答えた。

## 彼の食事風景

利央は服を与えられ、それに着替えた。簡素なシャツとズボン。まるで中世の人間のような恰好をした自分がナイキの運動靴を履いているのが少しおかしかった。

こちらの天幕に移動させられた時、外はもう夜だった。

いくつもの天幕が張られ、鎧を着こんだ男たちが食事をしていた。まるで戦場のような感じだったが、ここは戦場だったなと思いつつ、

天幕にあつた椅子に座り、これからの身の振り方について考えているとユニテルが天幕を訪れた。

「フジキリオウ。食事にしようか。」彼女は手にした器とパンを机に置いた。器に盛られたシチューからは湯気が立ち上っていた。置かれた食事が一人分であることに気付き、利央は尋ねた。

「あなたは……、王女様は食べなくて良いのですか。」

「王女様とは。それほど畏まらなくて良い。ババの話ではお前は赤子だそうじゃないか。私のことは母親と思って良いぞ。」この歳でこんなに大きな子を持つとは思わなかったがなと彼女は利王に匙を渡した。

「そうだな。私のことはユニテルと呼ぶが良い。敬称はいらぬし敬語でなくて良い。恐らくこの国の人間ではないものから敬われようとは思わないからな。」

母親と思えとか呼び捨てで良いとか随分くだけた性格の王女もいるものだなと利央は思った。が、当然、王女などというものには出会ったことがなかったたので、こういうものなのかも知れないと思つた。百聞は一見にしかずだ。

「分かった。母親とは思えないが、普通に話しはさせてもらおう。正直慣れない敬語で気が滅入っていたんだ。」その言葉に利央とユニテルは軽く笑いあつた。

「僕のことは利央と呼んでほしい。それが僕の名前だ。」

「リオウだな。分かった。そう呼ばせてもらおう。」

彼女はそう言い、自分はもう食事は済ませたからとまだ食事に手をつけていなかった利央に食べるよう勧めた。

利央はシチューを一匙、口にした。塩味がきついように感じたが、その食事には利央の緊張をほどいていく温かさがあった。

それを見ながらユニテルは言った。

「食べながらで良いから聞いてほしい。これからのことだ。」

「これからのこと？」利央は問い返す。

「後一刻ほどで、この隊は賊に襲撃をかける。夜とはいえ、向こうも斥候を出しているだろうから、私たちを迎え撃つ準備はしていると思う。」

だが、こちらは国の正規軍であることに加え、数も圧倒的だ。楽な仕事とは言わないが、そう大した被害もなく、賊を討つことができるだろう。

賊を討つ間、私は隊の指揮をとる。

念のため聞くが、お前は剣を扱ったことがあるか。」

利央は首を横に振る。剣を扱ったことなどあるはずがなかった。

「であるうな。やはりお前と一緒に連れて行くことはできないな。」

お前はこの陣に先ほどいたババと残っていてくれ。」

戦いに連れて行かれても困る、そう思った利央は素直に頷いた。

「うむ、よい子じゃ。万が一のためにこの剣を渡しておこう。」

しばらく私は留守にするが、良い子にして待つておるのじゃぞ。

ママがいないと言って泣くんじゃないぞ。」

からかう様な口調で、笑みを浮かべながら彼女はそう言った。

渡された剣はかなり重かった。こんなものが振るえるのか？

そう思い、鞘がついたままの剣を両手で握り、正眼に構えた。

その構えを見たユニテルが笑い出す。

「変な構え方だった？」利央は少し恥ずかしい気持ちで尋ねた。

「いやいやいや。特段変な構えではないよ。十分だ。」

ただ、美少女が剣を構えるのがおかしくてな。」

大声で笑いながらそんなことを言われ、利央は頭に血が上った。

美少女とは彼が一番言われたくない言葉だった。

平凡な人生を目指す彼にとっての非凡な見た目。

幼い頃はその見た目をからかわれ、中学を過ぎてからは、男から告白されるようになった。電車で痴漢にあったことも一度や二度ではなくあった。

平凡を目指す彼にとっての障害、それが彼の外見であった。

「美少女が剣を構えるのがおかしいというならばユニテルが剣を構えることもおかしくなるじゃないか。」

腹立ち紛れにそう返した。

「はっ？なぜ私が剣を構えると…、そっ、そうか。」

ユニテルは耳まで顔を赤くした。

## 彼女の戦い

およそ百の兵がユニテルの前に立ち並んでいた。

斥候からの情報では、賊達の集落は静まりかえっており、特に襲撃に備えている気配もないようだ。見張りが数名、配置されているとのことだが、時間をかけて攻める気はユニテルにはなかった。見張りが敵襲を知らせた時には、賊たちの集落へ攻め込んでいるだろう。ユニテルはそう考えた。

賊の集落は、ユニテル達が陣を張っている場所から見下ろせる位置にあった。木材により集落の周りを囲んだ砦を築き、事前の情報ではそこでおよそ六名の賊が暮らしているとのことだった。

ユニテルの作戦は、騎兵により門を破り、歩兵を中に突撃させる。一組の騎兵を門の前に残し、逃げ出てくる賊を討ち倒すという単純な、およそ作戦と呼ぶのが憚れる内容だった。

「お手並み拝見といきましょうか。」

ユニテルの後方にひっそりと立つカミステルが呟く。まさにそれが合図であったかのようにユニテルは兵に呼びかけた。

「これから、我らは賊に対し襲撃をかける。良いか、もう一度確認するが、女、子供には手を出さな。我らの相手はあくまでも戦力を持った男たちだ。それを誤るな。」

相手が戦意を失った時点でこの戦いは終了だ。投降も受け入れろ。

むやみに死者を増やす必要はない。」

彼女は兵たちの顔を見渡す。皆、士気に溢れていた。

「全員、出撃！」彼女は号令を出した。

「あまいな。」陣に残り出撃を見送ったカミステルは呟いた。

「何が甘いというのじゃ。」後ろから声をかけられる。

そこには、ババと利央が立っていた。

「これはこれは。占い師のセキバ様ではございませんか。後ろには

フジキリオウもおられる。

あまいというのはただの中年の戯言ですよ。ご高名な占い師の方が気にされることではありません。」

口の端を吊り上げカミステルは告げる。

「ふん。ご高名など見え透いた世辞を言いおつて。僕は盲いた占い師ではなかったのかえ。」

セキバはそう返した。ちなみにセキバは盲目ではない。未来を見通す力がないと揶揄する意味で盲いた占い師とカミステルは表現したのだ。

「先ほどは大変失礼しました。姫様の勝利を確実にするために怪しい者は全て取り除こうと、つい気が立ってしまいました。セキバ様には是非お許し頂きたく。」そう口にするが、彼の視線は利央を睨みつけていた。

「ふん。まあ良い。そんなことよりも姫様があまいというのはどういうことじゃ。」なおも問うてくるセキバに、大した意味はないのですが、カミステルは説明し始めた。

「あまいというのは、賊に対してですよ。女、子供には手を出さず、投降も受け入れる。彼らの罪は明白なのですよ。一族郎党、死罪が当然でしょう。それをわざわざ助けると仰られる。これをあまいと言わず何と言いましょうか。」

「姫様は慈悲深い方なのじゃよ。お主と違い、情というものがある。」

「情があるのならばなおさらでしょう。投降したものを受け入れて、死を待つ時間を長引かせるより、ここで死を迎えさせた方が彼らのためです。セキバ様はただ死を待つ時間がいかに狂おしいかご存知で？」

「まるでお主はそれを知っているかのような口ぶりじゃの。」  
カミステルはセキバの指摘に苦い表情を浮かべた。

「いやいや、あくまでも想像ですよ。想像。」

少し話がそれましたな。

あまいと言ったのは、私なら兵を突撃させるようなことはせず、皆に火をかけ、逃げだしてくる賊を片付ける。そういう方法をとると思っただけです。それが、味方にとって一番被害が少ない。

姫様は賊の命を心配するあまり、味方の命を危険にさらそうとしている。それをあまいと言ったまです。」

利央は、彼の言うことにも一理あると感じた。戦いのことはよく分からないが、いや、良くわからないからこそ感情を抜きにした考えが利央には理解できた。

カミステルに言い返すため、セキバは口を開こうとしたが、カミステルによつてそれは遮られた。

「ほら、始まりますよ。我らはここで高みの見物と洒落込もうじやありませんか。」

ひどく楽しそうな表情を浮かべるカミステルの視線の先には、今にも門を打ち破ろうとする騎兵たちの姿があった。

## 彼女の敗北（前書き）

拙い文章力ですが、よろしくお願ひします。

## 彼女の敗北

疾駆する騎兵は縄を握りしめていた。縄の先には先端の尖った丸太がくくりつけられており、それを四騎の騎兵で運んでいる。

彼らはそのままの勢いにのり、丸太を砦の門に打ち付ける。轟音とともにひしゃげる門。間髪を入れずに第二陣の騎兵が新たな丸太を打ち付けた。

門は粉々に砕け散り、砦は大きな口をあけることとなった。

その口から、歩兵たちが鬨の声を挙げ、砦内に突入した。歩兵たちは賊を討ち果たすべく、次々と突入していく。

その光景をユニテルは黙って見ていた。

彼女の周りには十騎の騎兵がいる。彼らはここで逃げ出てくる賊達を打ち取る役目を負っていた。

しかし、何か様子がおかしい。砦内から戦闘を行っている気配が一切感じられない。突入した歩兵たちがあげる声すらも今は聞こえなかった。

しばらくして一騎の騎兵が門から出てくる。

賊かと騎兵たちは身構えたが、味方の騎兵だった。騎兵は報告、報告と叫び、ユニテル達に近づいてきた。

「賊がないだと？」

報告の内容は、砦内には賊どころか人っ子一人いないというものだった。

（逃げたか、いやしかし、事前の偵察では確かにあそこで賊どもが暮らしているとの話であった。）

報告にきた騎兵に今後の対応を指示しようとしたその時、それはユニテルの目に映った。

火矢。

無数の火矢が砦の外から撃ち込まれる。

それに呼応するように大勢の人間が森から姿を現し、砦内の入り

口に集まってきた。

(やられた。) 瞬時にユニテルは悟った。

砦内には油が撒いてあったのだろう。天を衝くほどの火炎を巻き上げ、目の前の砦は燃えていた。

門の前では逃げ出してきた騎兵や歩兵たちが次々と賊に打たれていく。

(まさか、自分たちの砦を自ら焼くとは……)

<この討伐で大きな困難に遭いなさる>

目の前で繰り広げられる惨劇の光景を見つめながら、ユニテルはババの言葉を思い出していた。

巻き上げられる火炎を見つめながらカミステルは笑った。

「何がおかしいのじゃ。」ババに問われる。

「いや失礼。こんなにも見事な負け戦を拝見できるとは思いませんでしたゆえに。つい笑ってしまいました。」

「味方の負け戦を見て笑うとは何と不敬な奴じゃ。」

主も兵なら、姫様を助けに戦場へ向かってはどうじゃ。」

「私は考えることが専門でね。武術の方はどうも苦手です。とてもじゃありませんが、あそこに単身乗り込んで姫様を助けるなど。とてもとてもカミステルは笑う。」

「では、何か策を考えたらどうじゃ。」

「この状況からの逆転の策などありませんよ。この戦はすでに詰んでいる状態です。非力な男と老いぼれ、赤子にできることは一刻も早くここを逃げ出すことだけですよ。」

ああ、もう一つできることはありません。せめて姫様の無事を祈ることでしょうか。」カミステルは笑い続けた。

「それにしてもセキバ様も落ち着いておられますね。姫様の窮地だというのに。」

「儂には見えておるのじゃ。姫様の運命はここで潰えないことが。逃げるなら好きにするが良いぞ。儂はここで姫様を待つ。」カミス

テルには目をやらず、目の前の火炎を見つめながらセキバは答えた。  
「それはそれは。では、私はここで退散させて頂きましょうかな。」  
そう言いながら彼は利央に目をやった。

「君はどうします。フジキリオウ。良ければ私が連れて行ってあげますよ。」

その言葉にセキバもフジキリオウに視線を向ける。

しかし、利央には彼の言葉もセキバの言葉も耳に入らなかった。  
ただただ火炎を見つめていた。

ひどく血が騒いだ。

燃え上がる火炎。

湧き上がる悲鳴。

響き渡る剣戟の音。

戦場だ。ここは戦場だ。

心臓が激しく脈打つ。

送り出された血液が全身を巡るのを感じる。

荒くなる呼吸。

次第に視界が狭まり、全身が奮い立った。

そこで利央の意識は途絶えた。

## 彼女の敗北（後書き）

技術向上のため、評価して頂けると嬉しいです。

彼女の危機（前書き）

楽しんでってください。

## 彼女の危機

ユニテルは賊達に囲まれていた。騎兵たちは彼女に逃げるよう勧めたが、彼女は逃げなかった。自身だけが逃げることを潔しとしなかったのだ。

（これは討伐をあまく見ていた自分自身への罰なのだ。）彼女はそう考えた。

所詮賊、たかが賊と侮っていた。賊ごときが帝国の正規軍に敵う訳がないと。自分は最善を尽くしただろうか。この戦いに兵の生命がかかっていることを意識していただろうか。ここは戦場。これは戦なのだった。

（そうこれは戦だ。戦。生命の奪い合い。私にはその意識が欠けていた。）

ユニテル達を取り囲む賊達は下卑た笑みを浮かべていた。

（私はこの戦に負けた。ならば、ここで生命を失うのも当然ではないか。）

ユニテルは死を覚悟した。しかし、ユニテルを待っていたものは死よりもなお過酷なものであった。

「見れば、見るほど良いじゃねえか。」

「ああ少し幼い気もするが、構やしねえ。お頭、これは当分楽しめますぜ。」

お頭と呼ばれた男がユニテルの前に進み出てくる。

「まあ待て、まずは俺が楽しんでからだ。お前らの相手もさせると値は下がっちゃうが、仕方がねえ。皆まで焼いたんだ。精々楽しもうぜ。」

その言葉にお頭ずりいだとか、俺が先だなどと喜びの声があがる。「じゃあ、ゆつくり、たつぷり楽しむためにまず、周りで固まっている木偶の坊たちを始末しちゃうか。」

賊達は奇声を上げ、騎兵達に襲い掛かった。

「……フジキリオウ……。」

セキバは驚きの表情で利央を見つめる。

利央は上体を前のめりに倒し、両の腕をだらりとたらしっていた。

髪は逆立ち、獣が発するようなくぐもつたうめき声をもらす。

（まさに獣。）セキバにもカミステルにもそう印象づける姿であった。

利央（今の彼をそう呼んでもよいのなら）は、ぐるりと顔を彼ら二人の方向に向け、睨みつけた。

「ひつ。」カミステルは思わず短い悲鳴を上げる。

彼らを睨みつけた利央の目、瞳は爬虫類を思わせた。つまり、光彩が縦長になっていたのだ。その瞳は金色に輝き、犬歯だろつか、口からは上下に二本ずつ牙が生えていた。

（これが竜憑き。）

セキバがこの事態に何と応じたら良いかと思案を巡らせたその時、ふと興味を失ったかのように、利央は彼らから視線を外し、皆へとその視線を向けた。

そしてぐつと下半身に力を込めたかと思うと、利央は二人の前からその姿を消した。

騎兵たちが討取られ、今ユニテルの前には上半身の服を脱ぎ、腰ひもをほどこきながら近づいてくる男の姿があった。その顔には興奮と喜びの表情が張り付いていた。

「じゃあ、ゆつくりと楽しもうぜ、お嬢ちゃん。何、俺様は優しいことで有名なんだ。味わったことのない快樂を教えてやるぜ。」

そう言いながら、ユステルの鎧に手をかける。

ユニテルは恐怖で声もでなかった。

「ん？震えているのか。可愛いじゃねえか。やつぱり慣れた商売女と違って、素人の女を無理やりやるのはたまんねえぜ。」彼ら賊が、金だけでなく、女たちまでも奪ってきたことを伺わせる発言に、ユ

ニテルは怒りを覚えたが、彼女は何もなすことができなかつた。ただその身をこれから行われるであろう行為に対しての恐怖で震わせることしかできなかつた。

自分はこれからこの男に奪われ、奪いつくされるのだ。

彼らの犠牲になつた者たちの恨みに応えることもできず、自分も彼らの犠牲者となり、未来においても彼らの犠牲者は増え続けるのだ。

それを思うと悔しくてならなかつた。今日、自分がここで彼らに勝利していれば、少なくとも未来の犠牲は防げたはずだ。自分はそれを防げる立場にいなから、それを防げなかつた。

十分な兵力、戦力を与えられながら。自分は成す術もなく敗れたのだ。

ユニテルの吊り上つた大きな瞳から、次々と涙が零れだした。

「そそるねえ。」ユニテルの鎧を剥ぎ取り、シャツを脱がそうとしていた男が、その涙を見てさらに喜びの声を挙げる。そして彼女の唇を奪おうとその頤に手をかけた瞬間それは現れた。

藤木利央だつた。

## 彼女の危機（後書き）

……まだ主人公が活躍しない……。

主人公は藤木利央ですよ。

忘れないでやって下さい。

技術向上のため、評価をつけて頂けるとありがたいです。  
よろしく願います。

“彼”ができること(前書き)

ようやく、利央?活躍です。  
楽しんでって下さい。

## “彼”ができること

それは暴風だった。豪雨だった。落雷だった。地震だった。津波だった。

つまり災害であつた。

それは轟音と共に現れた。

賊達の後方で轟音が鳴り響いたかと思うと、地面に大きな凹みが出来ていた。

砂埃が立ち、賊達は一体何が起こつたのかと騒ぎ出した。砂埃が次第に晴れだし、徐々にそれは姿を現す。

藤木利央。

髪を逆立たせ、奇妙な姿勢をとつた彼は、顔を天に向け吠えた。

賊達は心からの恐怖に身を震わせた。およそ半分を超えるものが恐怖に負け、気を失つた。

魂を揺さぶる咆哮。

あまりの出来事に、気を失わなかつた者たちは、自分達が神話の世界に足を踏み入れたのだと感じた。

咆哮を終えたそれは凹みから這い出し、ゆっくりと彼らに歩み寄る。知らず、彼らは二つに割れ、それとユニテルとの道を開いた。

そのの視界に、男に押し倒されていたユニテルが映る。

彼女の頭を持ち上げた男に視線を向けると、それは喋つた。

「その女は余のものだ。下賤の者が触れてよいものではない。」  
「  
けて大きな声ではなかつたが、不思議とその声は鳴り響いた。  
賊達は自然と、地に片膝をつき頭を垂れた。触れてはいけないもの  
のに触れた、怒らせてはいけないものを怒らせた。そう感じた。中  
には必至で許しを乞う声もあつた。」

ユニテルに手をかけていた男、賊の頭だけが動けなかつた。早く

手を離さなければ、言い訳をして許しを乞わなければ、そう思ったが全く動けなかった。

彼が必至で体を動かそうとしている間もそれは近づいてくる。

それは二人の前に立つと、ユニテルを見つめた。そしてその手をとって、彼女を立ち上がらせた。

彼女の腰に右手をやり、背をそらせると、ゆっくりと左手で彼女の涙をぬぐう。さらに、二本の指で彼女の唇を軽くもて遊ぶと、彼女の瞳の下に口づけた。

不意の出来事にユニテルは全く抵抗ができなかった。これは一体なんだと考えている内に、次々と口づけをされる。

頭頂部、髪の毛、額、まぶた、頬、耳、首筋、鎖骨、そして唇。

まるで少しでも力を加えると壊れてしまうものを扱うかのように優しく口づけを行う。

「エリミエル。」

彼は愛おしげに彼女をそう呼んだ。

ユニテルは、羞恥に全身を赤く染めた。自分の心臓の鼓動どころか、血液が体を巡る音さえも聞こえた気がした。体から力が抜け、彼女は腰からくだけ落ちた。

利央はそれを満足そうに見つめると、賊達に告げた。

「断罪の時間だ。」

利央はゆっくりと腰に下げた鞘から剣を抜き放った。

「まず、お前。」

動けずに彼とユニテルの行為の最中ずっと隣に立ち尽くしていた頭的首筋にその剣を当てた。

「何か。言うことはあるか？」

余にも慈悲というものがあるぞ。」

利央は頭に優しく笑いかける。

「……た、助けて下さい。」頭は何とかその言葉を口にした。体は今も動かない。全身の力が抜け、涎を垂れ流し、糞尿までも垂れ流し

ていたが、彼はまだ立っていた。

「そうか。許しを乞うか。」

今、余は、エリミエルと触れ合ったことで大変機嫌が良い。全身に愛が溢れている。

「この愛をお前たちにも分けてやりたいと思うほどだ。」

「じゃ、じゃあ……」地獄に垂らされた蜘蛛の糸をつかむかのような希望が頭の中に湧く。

「死罪だ。」

そう言った瞬間、頭の首は切断されていた。利央の姿勢は先ほど、頭の首筋に剣を当てた姿勢と全く変わっていない。

「えっ。」首を切られた当人でさえもその死に気付かず、落ちていく頭部からそんな言葉を発した。

「余の溢れる愛でお主達を救ってやろう。」

お前たちの罪は、余の女に手を出した、危害を加えた、恐怖を感じさせた。その他彼女に対して行ったこと全てだ。

本来なら、自身で首を切れと命じるところだが、今の余は機嫌が良い。

余自ら、お主達を裁いてやろう。」

数分後、その場は無数の死体で埋め尽くされた。

“彼”ができること（後書き）

そう言えば、「恋愛」というキーワードを入れてたな、ということ  
でこの展開です。

まあ、決して、これは恋愛と呼べるものではないですが…。  
せくはら？

技術向上のため、評価して頂けると有難いです。  
よろしく願います。

そして道は開かれる（前書き）

とりあえず一区切り。

文庫本でいうと一冊の四分の一に満たない程度でしょうか。

ではでは。楽しんでってください。

## そして道は開かれる

「あれは一体何なのです？」声を震わせながらカミステルはセキバに問うた。

彼は自身が、先ほどの咆哮を聞き、よく意識を保っているものだと感じていた。本当は今すぐ片膝をつき、頭を下げたい。そんな気持だった。

セキバは彼の問いに沈黙していた。彼女自身もまた、同じ気持ちだったのだ。しかし、彼女は知っていた。あれの正体を。

竜憑き。

自分で視たあれの正体だが、今それを目の当たりにするまでは、彼女自身もそれを信じていなかった。

利央を視た時、確かに彼に竜憑きの存在を感じた。だが、それは利央自身の運命を暗示させるものとして感じたのだと考えていた。

まさか利央自身が竜憑きとは！

彼女はカミステルの疑問に応えたかった。知られてはならないと分かりながら、今すぐ、全ての者に竜憑きの存在を打ち明かし、彼女の恐怖を分かち合って欲しかった。しかし、口にした言葉はそれを否定するものだった。

「分からぬ。僕にもまた、あれが何なのか、分からぬ。」

「貴女には視えているのでしょ。だから、彼が賊ではないと断言した。本当は知っているのでしょ。」

見なさい、あそこを。貴女は彼を赤子だといった。この世のことなど一切知らぬ、生まれたての赤子だと。その赤子が今、無数の死体の中に立っているのでしょ。

たった一人で。

数々の村を襲った賊を、姫様の軍を打ち破った賊どもをたった一人で薙ぎ倒したのですよ。」

カミステルは、セキバを責めた。まるで彼の正体を知ること、

この恐怖から逃れられる、そう信じているかのようだった。

「分からぬ。儂には分からぬのじゃ。」

セキバは頑なに、その言葉を繰り返した。

血が滴る剣を持ち、全身を赤黒く染めたそれがユステルに目を向けた。

「リオウ？リオウではないのか？」

地面にへたり込んでいるユステルは声をかけた。

「リオウ？」

余は今、リオウと名乗っているのか。なかなか面白い名だ。

気に入った。」

出会った頃のリオウとは思えない、威厳に満ち溢れた声で利央が呟く。

逆立っていた髪は、元の通りに治まり、生えていた牙はその成りを潜めていた。

無数の中に血まみれの美少女が立っている、そんな光景だった。

ユステルはその光景をとても美しいと感じた。

利央は、可愛らしく小首を傾げ、暫く黙考した後、ユステルに告げた。

「余はまた眠りにつく。

だが、必ずお前を迎えにくる。

お前は俺のものだ。先ほどのような事は、絶対他の男に許すなよ。

愛しい俺のエリミエル……。」

そうして彼はその場に崩れ落ちた。

慌てて彼に駆け寄ったユステルは、彼が息をしているのを確認し、安堵の息を漏らした。

利央の頭を彼女の膝にのせ、優しく彼の髪を撫で上げる。

「こうして見ると、綺麗な女の子にしか見えないのに。

さっきのは一体何だったの？リオウ。」

そう問いかけても誰も応えるものはいなかった。

「あなたは私にとっての光。私の運命を変える者。

あなたが現れなければ、私はここで生命を落としていた。

あなたが私をあなたのものだというなら、それで良いわ。私はどこまでもあなたについていく。

だからあなたも決して私を離さないでね。」

彼女はそう言い、まるで誓いをたてるかのように、彼に口づけた。

こうして彼は彼女と出会った。

帝国歴一五四九年の夏のことだった。

彼と彼女の出会い、お互いの運命を変えた。

そして彼らはまた、その周囲の運命を大きく変えていくこととなる。

彼らの運命、そして彼らに関わっていくことになる全ての者の運命がどうなっていくのか。

それはまだ誰も知らないことだった。

## そして道は開かれる（後書き）

色々思うところはありますが、ここで一区切りです。  
すぐに続きは書きますが…。

また、懲りずにお付き合い頂ければ幸いです。

技術向上のため、評価して頂けると助かります。  
よろしく願います。

## 第1章 まとめ（備忘録）

第1章のまとめ。備忘録的な内容です。

ですので全く読まなくて良いです。

読み飛ばし可中の読み飛ばし可です。

キング オブ 読み飛ばし可です。

その日の私の気分で完全アドリブで書いているので、

今後齟齬や矛盾を生じさせないようにまとめたものです。

（すでに生じているかもしれませんが…）

せめて登場人物や、場所の名前を間違えないようにするためだけの  
ものです。

では。

### 時代

帝国歴1549年。夏。

中世をイメージしています。

### 場所

ノキテイル帝国

帝都はフリリンクス

第1章は帝国の西方、馬で四日ほどの距離にある、  
フリミエールと呼ばれる村の近郊で展開。

### 登場人物達

藤木 利央

ふじき

りおうち

主人公。平凡な人生を願ってやまない高校生。  
その割に結構壮絶な生活をしていた。

年齢は15歳。

外見は美少女。よく男から告白される経験をもつ。

ひよんなことからユニテル預かりとなり、彼女の身の回りの世話をすることになる。

∴外見については美少女としか書いていない。

いつか書かねば。

竜憑き。

竜憑き時は偉そうな言葉づかいになる。一人称は「余」

ユステルのことをエミリエルと呼ぶ。

竜憑きはエミリエルのことを愛してやまない。

ユニテル・フリックス

ノキテイル帝国の王女。三人の兄がいる。

娘は彼女一人。

赤色の髪が腰まで伸びている。彼女はそれを首のあたりで一括りしている。

瞳の色は赤。大きく吊り上っている。

肌の色は病的に白い。身長は低く、体つきは華奢。

竜憑き時の利央にエミリエルと呼ばれる。

年齢は藤木 利央と大体同じ。

セキバ

占い師。未来を視る力がある。

作中ではババと呼ばれたり、オババと呼ばれたり、統一感がない。

これはただの失敗。

ババで統一することにする。

外見はフードを被っており、現在詳細不明。年齢も詳細不明。

声から老婆だと推定されている。

カミステル

中年男性。

肉体労働ではなく頭脳労働担当。

ユニテルとセキバからは兄たちからのスパイだと思われる。割と現実的な考え方をする。

「死を待つ時間」について苦い思いをもつ。

：こいつも外見について書いていない。

いつか書かねば。

カミステルも苗字なのか名前なのか。まだ何も考えてません。ユニテルとカミステルでテル、テルと続きちよつとヤダなど

思っています。

エミリエル

竜憑き時に利央がユニテルを呼ぶ名前。

竜憑き時利央に病的なほど愛されている。

エミリエルは竜憑き時利央のもの。（竜憑き時利央談）

トイテ・フリックス

ユニテルの父。現皇帝。

それ以外は何も設定していません。

三人の兄

ユニテルにカミステルを送りつけたと考えられている存在。それ以外は何も設定していません。

葛城 ゆずは（かつらぎ ゆずは）

利央の幼馴染的存在。

年齢は16歳。

彼女の両親にお世話になることで利央は食いつないできた。

利央が密かに心を寄せる人物。

…彼女の外見も書いていない。いつか書かねば。

利央母・騎兵たち・歩兵たち・賊の頭・賊たち・放課後の女子  
生徒たち

特にコメントはありません。

安らかにお眠り下さい。

こんなところでしょうか。

特に名前は適当につけたので、どっからそんな名前が出てきたのかさっぱりわかりません。

何かの商品名だったらほんとすいません。

こんな感じで適当に書いてますが、読んで楽しんで頂ければ幸いです。

僕の暇つぶしが、皆様にとって良い暇つぶしになりますように。

**兄妹たちの心温まる風景（前書き）**

第2章開始です。

楽しんで読んで下さい。

## 兄妹たちの心温まる風景

これは一体何の茶番劇なのだろうとユニテルは思った。

フリミエールでの討伐の後、生き残ったユニテル、セキバ、カミステルと利央の四人は、ノキテイル帝国の帝都、フリックスに戻った。

王城に入り、休息をとる暇もなく、ユニテルは三人の兄たちに討伐の報告に向かった。

すでに村の警備兵から早馬で報告が挙がっていることは分かっていたが、三人の兄たちは形式を好む。直接ユニテルから報告を受けることで、お前は俺たちより下の存在なのだと思い知らせたいという性格であることをユニテルはよく知っていた。事実、これまでも報告に行かなかったがために様々な嫌がらせを受けたことがあった。わざわざ無駄なことをすることはユニテルの好みではなかったが、少しの労を惜しむことで、さらなる労をばらうことになるのもっとユニテルの好みではなかった。

そして今、彼女が立つ前に三人の兄が座っていた。

長男のカニス。たるんだ顎に、突き出た腹。頭頂部は禿げ上がり、唇は厚ぼつたい。目が細いのは、太っているせいだ。

「この度の討伐はご苦労であったな、ユニテル。  
兵がやられたのは惜しいが、お前が無事であったことがなによりだ。」

炒った豆を口に入れ、もごもごと咀嚼しながら言う。豆のせいで唇がぬめりと油でぎらついている。

「まあ、こういうこともありますよ。兄様。万事滞りなく行えることの方が珍しいのですから。」

そういったのは次兄のヘイト。長兄とは対照的に痩せぎすで、華奢というより、頼りない雰囲気を漂わせていた。決して、人に良い

印象を与えない三白眼でユニテルを見ている。

「だが、賊どもを全て討取ったというのは大きい。これでフリミエールの民も安心して暮らしていけることだろうよ。」

三男のミハイニ。えらがはっており、顎も角張っている。短く刈り込んだ髪に、厳しい環境に身をおいてきたためか、その眼光は鋭かった。肩幅も広く、技ではなく力で押す類の剣士だった。

「ふむ。兵は失ったが、手柄はたてたか。お前は、此度の討伐、自分自身をどう評する？」

またかとユニテルは思った。彼らを訪問してから、もう一刻は経つ。その間、何度も繰り返し返されてきた会話だ。ユニテルの無事を喜び、兵を失ったことを責め、そして賊を討取ったことを褒め称える。ユニテルは彼らが自分に何を言わせたいのか分かっていたが、彼らの思い通りになるのが嫌で言い出さなかった。言っておけば良かったと、愚かな自分を恨んだ。

「此度の討伐は、大局で見れば明らかかな失敗でしょう。確かに賊を討取るといふ成果は挙げましたが、兵を失ったこととは釣り合いません。フリミエールの民は国の貴重な財産ですが、兵もまた貴重な財産です。それを少数の被害ならともかく全滅したというのは失敗以外の何ものでもありません。」

「ほう。失敗と評すか。では聞くが、その失敗の原因はなんだ？」  
ヘイトが問う。その顔には哄笑が浮かんでいた。

それを私に言わせたいか、この蛇めと心の中で毒づきながら、ユニテルは応える。

「原因は私わたくしです。兄様方。賊に倍するほどの兵を与えられながら、賊の奸計に嵌ったのは、全て私が未熟者ゆえ。」

本来ならば、その恥ずかしさから、兄様方の前にこの身をさらすことも厭われましたが、私の責任をおいて逃げ出すこともできませぬゆえ、こうしておめおめと報告に参りました。

こと、ここに至ってはどのような処罰でも受ける所存でございませぬ。」

ユニテルは早くこの場を立ち去りたい一心だった。ここまで遜った態度をとる自分に対し、羞恥で全身を赤く染める。

(もう満足したでしょう！ここまで私を辱めて！お前たちの卑しい心は満たされたでしょう！)

「まあまあ、ヘイト。そうユニテルを苛めるでない。妹も十分反省しているようだし、ここは妹よりも長じている我らがユニテルの失敗を許してやるうではないか。」恩着せがましく、カニスが言う。

「しかし、兄上。本人が望んでいる通り、何らかの罰は与えねばなりませんまい。何より罰を受けねば、妹自身が亡くなった兵に対して申し訳がたためというものでしょう。」ミハイニが腰に下げた剣を触りながらそう言った。

「ほう、武人とはそういうものか。儂としては、功績と失敗で相殺にしようかと思っていたが。申し訳がたためというのならば、何らかの罰を与えねばなるまい。」たるんだ顎に手を宛て、思案顔でカニスが言った。

それにヘイトが応じた。

「では兄様。こうしてはいかがでしょう。幸いユニテルにはこれまでに国の治安に努めてきた功績があります。いずれ褒美をとらせるつもりでしたが、忙しい妹には褒美を与える暇もなかった。

これまでの功績と此度の功績をあわせ、妹には褒美を与える。ただし、褒美がただ妹の得となっただけではない。此度の失敗の罰も同時に与える。そのような案はいかがでしょうか。」ヘイトはいやらしい視線をユニテルに向けた。

「ほう。そのような都合の良い案がありますか。ヘイト兄様。」

ヘイトは思わせぶりにたっぷりと間をとった後、皆に告げた。

「ワイトダウですよ。ユニテルにワイトダウの領地を与えるのです。」

本当に茶番劇だ。ユニテルはそう思った。

## 兄妹たちの心温まる風景（後書き）

三人の兄に触れた方が良かったらうなと思って書き始めたらまさかの展開に。

一体どうなるのでしょうか。

技術向上のために、評価して頂けると幸いです。

兄弟たちの心温まる風景（前書き）

王女ではなく皇女でしたね。  
間違いでした。

楽しんでって下さい。

## 兄弟たちの心温まる風景

皇帝は死に瀕していた。

とはいえ、以前から病がちであった皇帝が、病床に留まったところで政務に影響はない。皇帝がしばしば体調を崩すようになってから、政務については三人の息子たちがとりしきっていた。国民の関心、とりわけ貴族達の関心は皇帝がいつ死に、次の皇帝に誰がなるかということであった。

皇子たちもまた、同様の関心を抱いていた。

表面上彼らはお互いに協力しあっていた。彼らには共通の敵がいるため、一時的に手を組んでいたのだ。

彼ら三人の共通の敵、それはユニテルだった。

特にどうということではない。全ては彼らの妄執である。彼ら三人は側室の子でユニテルは正室の子である、ただそれだけでユニテルは兄たちから敵視された。

彼らは形式に拘った。あるいはそれは側室の血を引いているということが影響しているのかもしれない。長男、それも男子であるカニスが次の皇帝になるというのが通常の考え方であろう。しかし万が一、正統な血筋をと望む声があがるかもしれない。何より彼らが正統な血筋ということに畏敬を覚えていたし、過去にも同じ例がいくつもあった。彼らはそれを恐れた。ゆえに、彼らは結託し、ユニテルを追い落とすことに心血を注いだ。

つまりユニテルを国の治安維持部隊にあてたのである。

ユニテルが国の治安に功績を残してきたのはそのおかげであった。彼らの思惑は、ユニテルに失敗させ、彼女を責め、彼女の評価を下げることであった。そして彼女が亡き者になれば一番良い結果となるはずであった。しかし、ユニテルはその悉く（たことごとく）に成果を挙げ、逆に彼女の評価を上げることになった。無論、彼女が帝都をしばしば留守にする間に、帝都での彼らの地盤を着実に固めることは忘れなか

った。

そんな彼らにとってフリミエール討伐での彼女の失敗は歓迎すべき出来事であった。

「あれをワイトダウにやるというのは良い案であったな。」カニス  
がヘイトに言った。

ユニテルは既に退席し、この場には三人の皇子だけが残っている。  
「あそこは特別な地ですゆえ。」ヘイトはそう応じた。

彼らは非常に満足していた。先ほどのユニテルとのやりとりは彼  
らの事前の打合せ通りであり、彼らの卑小な心を満たすには十分で  
あったためだ。

「確かにあそこへやれば、あれは封じ込めますな。あれには今度こ  
そ我らの期待を裏切らないで欲しいものですな。」言外に今度こそ、  
亡き者になつて欲しいと匂わせながら、ミハイニが言う。

「惜しいのは、彼女が遠方へいくことで直接手出しが出来ないこと  
ですな。」

「お前は……。まだあれを諦めてなかったのか。よいか、あれの美し  
さに惑わされるな。あれは毒にまみれてこの世に生を受けた魔性ぞ。  
うかつに手を出せば何をしでかすか分かったものではない。」カニ  
スがヘイトを諷めた。

「あれの母親を抱いた兄上に言われたくないですな。」誠に遺憾で  
あるという表情を浮かべ、ヘイトは応えた。

カニスは苦い表情を浮かべ応じる。

「今ユニテルを抱いても我らにとって何の益もない。軽率な行動は  
慎むべきだ。」

「益など必要ありませんまい。兄上があれの母親を抱いたことに何の  
益が？」

私はあれに精神的な苦痛を味あわせてやりたいのです。まあ、単  
にあれを抱きたいという思いもあります。

私があるを抱いたところで、あれは何もできませんまい。兄上がそ

ここまで反対するのは、あれが兄上の娘かもしれないからではないですか。」

その言葉にミハイニは驚きの表情を浮かべたが、カニスは全く動じた様子を見せなかった。

「何を戯けたことを。それはその可能性があるというだけの話だ。わしはあれを娘などとは思ってもおらぬ。」

そんなに女を抱きたいのであれば、あれの母親を抱けば良いではないか。ミハイニなどは喜んで抱いてるようだぞ。」

「人形を抱いて何が面白いのですか。女は泣き叫ぶから良いのです。」

ミハイニも自重するように。」

ヘイトの言葉に、ミハイニは何も言い返さず、ただ苦悶の表情を浮かべた。

（小賢しいヤツらめ。そんな秘密を握った程度で優位に立ったつもりか？

いざことが起これば、優位なのは軍を握っている俺だ。）

それぞれがそれぞれの思惑を抱き、兄弟たちの不毛な会話はいつ終わるともなく続けられた。

## 兄弟たちの心温まる風景（後書き）

技術向上のため評価して頂けると幸いです。

## ワイタタウ(前書き)

楽しんでってください。

## ワイトダウ

「ワイトダウに行くことになった。」

ユニテルの言葉に、セキバは表情を消し、利央は曖昧な笑みを浮かべた。曖昧な笑みを浮かべたのは何のことだか分からなかったからだ。

三人はユニテルの部屋で、円卓を囲み、紅茶を飲んでいた。紅茶の香りが彼らを楽しませる。しかし彼らの会話は彼らの心を楽しませるものではなかった。

「奴らの考えそうなことじゃな。姫様をワイトダウに縛りつけ、その間に実権を掌握しつくしてしまうつもりか。」忌々しげにセキバが言う。

「ババ。別に私は権力が欲しい訳ではないぞ。兄上達が政を行いたいならば行ってもらえば良い。私はそんな面倒なことは嫌だ。剣を振るっている方が性に合う。」

「何を馬鹿なことを。」

奴らが政を行いたいなど、そんな殊勝な気持ちで権力を欲している訳ではないことなど姫様が一番よくご存じではないか。下手をすれば彼の地で姫様を弑し奉ろうと考えているに違いありませんぞ。」

「まさか、そこまでは……。」

「無いとは言いませんまい。」ユニテルがセキバの言葉を否定しようすると間髪入れずにセキバが言った。

「うーん、言い切れないな。確かに。」ババは仕方ないかとユニテルは笑う。

「笑っている場合ではない。今はまだ姫様に死の影は見えぬから良いものの……。いつそれが見えても不思議ではないのじゃ。」

リオウ！そなたも姫様に拾われたのなら、姫様のために剣の一つでも覚えぬか！」

突然、話しを振られて利央は日本人特有の曖昧な笑みを浮かべた。

「えーい、いつもいつも。笑えば済むと思えば大間違いじゃぞ。」  
さらにセキバを怒らせる。

フルミエールでの討伐の後、利央はユニテルに従い、彼女の身の回りの世話をしている。とは言え、本当に必要なことは彼女の侍女が全てやってくれるので、実質利央はユニテルの話し相手となっているだけだった。

利央はフリミエールでの出来事を覚えていなかった。帰都の途中、何度かユニテルやセキバから話しを聞かれたが、何のことだか分からないと答えた。

彼女たちも竜憑きに触れることを恐れていたため、覚えていないと答える利央にむしろほっとした様子だった。

今日までの五日間、利央が以前いた世界 現代の日本のことを聞かれたこともなかった。

彼女たちは、本当に利央があの場合にあの瞬間生まれてきたかのようにならなかつた。利央としては聞かれても何と答えれば良いのか分からなかつたので、むしろ有難かつた。道を踏み外したらあそこにはいませんといつても誰も信じてくれないだろうと思つた。だから、彼女たちがそれについて聞いてくるまで、あえて自分から話す必要もないと考えていた。

ただ一つ困つたことがあつた。それはユニテルの態度だつた。母親と思つてくれても良いと言つていたが、彼女の態度は母親とは思えなかつた。

甘えるのだ。

ユニテルが利央に。

何かといえは一緒にいたがるし、体に触れてきた。嫌ではなかつたが、恥ずかしかつた。どう対応すれば良いのか分からなかつた。どうしてそんなに密着してくるのかと利央は一度、ユニテルに尋ねた。

「私はお前のものなのだろう?」

そう言われた。

悪戯な笑みを浮かべて。

猫のような大きな瞳で利央を見つめて。

いつ、ユニテルが自分のものになったのか。訳が分からなかった。そうして利央がこの世界に来てからの彼女たちの関係について思考を巡らせていた時、それが耳に入った。

「……だから、リオウには手始めに剣を覚えてもらおうと思う。せつかくの機会だから我らがワイトダウに行くまで、徹底的にリオウを教育させてもらおうぞ。」

そして私好みの男に仕上げるのだ。」

ユニテルがそう宣言していた。

利央としては剣をはじめ、この世界の教育を受けることは有難いことであったが、私好みの男とは何だと益々混乱してしまった。だから話しをそらす為に疑問を述べてみた。

「先ほど話しに出ていたワイトダウっていうのはなんだ。そこにユニテルを縛りつけるとはどういうことなんだ。」

明らかに話しをそらした利央に、面白くなさそうな表情をユニテルは浮かべたが、彼女は説明を始めた。

ワイトダウとは、帝国の北にある土地だ。そこはある事情により領主がおかれておらず皇族の直轄地となっている。

ある事情とはそこが境であるということだった。

ワイトダウより北は<黄泉>と呼ばれ、人外の者たちの土地とさわれていた。その土地の奥深くには闇の王が封じられているといわれ、そこからワイトダウの辺りまでは、闇の王の影響により、魔物や闇の眷属たちの棲家となっていた。

帝国の歴史において、過去数度の魔物たちの大侵攻があった。その度、帝国は彼らの大侵攻を食い止め、黄泉に送り返してきたが、その被害は甚大な数に及んだ。

だからこそワイトダウは帝国の、いや人類の守りの要（誰もそこ

を治めたがらないという理由もあったが）として皇族自らの直轄地とされ、防備のための軍がおかれた。

ワイトダウを領地として与えられるということは、同時にその重大なる責務を負うということを示していた。

だからユニテルはそこに縛りつけられるとセキバは言ったのだ。

その責務を離れて帝都や他の土地に出向くということは、ワイトダウの領主としてはできないことであった。

ワイトダウについての説明を聞き、そんな土地へ行かされるユニテルは兄たちとの関係がうまくいっていないのだと利央は察した。

先ほどのセキバの言葉にも頷けた。危険な土地へ赴くこととなったユニテルを守るために剣の一つでも覚えようと決心した。

この世界で自分を拾ってくれたユニテルへの恩義に報いることに心を熱くした利央であったが、同時に、闇の王、黄泉、闇の眷属という言葉に自分の中に自分とは違う存在が騒ぎ出すのを感じていた。

## ワイトダウン(後書き)

技術向上のため評価して頂けると幸いです。

彼がお姫様になった理由(わけ)(前書き)

楽しんでってください。

## 彼がお姫様になった理由（わけ）

部屋の中央で一組の男女が踊っていた。

彼らは窓から差し込む光を浴びて、まるで一枚の絵画のように様になっていた。

時折、男性が女性にステップの指導を行う。また、踊りを見ていた女性が、教わったステップを練習する女性に助言を与えていた。

ゆるく波打った栗色の髪が、彼女の大きな瞳に少しかかっている。襟足は彼女の白い首を隠す程度の長さだ。指導を行う男性の胸のあたりまでの背の高さで、女性としては少し背が高い。

彼女は形の整った細い眉をしか顰めながら、熱心に教わったステップを繰り返す。しかし、ステップを踏む度広がるスカートをしきりに気にする素振りを見せていた。

それも当然の話で彼女はその日初めてスカートを履いたのだ。た。

誰が見ても美少女としか言いようのない風貌の女性。

それは利央だった。

何故こんなことになったのか。

利央は昨日のユニテルの言葉を思い出していた。

「ワイトダウに向かう前に舞踏会が開かれる。名目上はワイトダウへ向かう私たちの無事を祈願してとのことらしい。」「ひどく憂鬱そうにユニテルが言う。」

「晩餐会ではなく、舞踏会というのがひどく作画的じゃな。言ってしまうえば姫様の婿探しも兼ねておるのじゃろう。」

兄たちの策は、ここにも仕掛けられていた。彼らにしてみれば、ユニテルが皇位を継げなければそれで良いのだ。そのため、ユニテルが貴族の誰か、もしくは他国の王族か貴族と結ばれればそれでも良かったのだ。ユニテルが嫁ぐことで国内の有力な貴族、もしくは

他国と絆を持つこともでき一石二鳥と言える。北風と太陽でいうところの太陽策であった。

「兄上たちも懲りぬ性格をしているな。いい加減諦めて欲しいものだ。」ユニテルはため息をついた。

過去に何度もユニテルの婿探しのための舞踏会は開かれてきた。国の治安のため各地を転々としてきたユニテルであったが、帝都へ戻ってくる度、舞踏会は開催された。

ユニテルは舞踏会を好まなかったが、戦勝を祝してだとか、勝利を祈願してなどとお題目を挙げられては断ることもできず、止む無く参加してきたのだった。

「また、馬鹿な息子や娘たちの見え透いたおべんちゃらで耳を汚されると思うと今から憂鬱だ。」

「じゃが、皆が皆、愚かとは言えぬじやろう。少なくとも、彼らはこれからの帝国を支えていく礎となるのじゃ。なかにはまともな奴もいるじやろう?」

ユニテルの愚痴にセキバが応じる。

ユニテルは不服そうな眼をセキバに向けた。

「まあ確かに。少なくとも十家の息子、令嬢のなかにはまともな奴がいるな。まあそれでも、数は限られているが。」

十家とは、ノキテイル帝国の貴族の十の名家だ。ノキテイル帝国の建国にあたり、最初から初代皇帝に仕えた、あるいは特に功績をあげた十名の家臣たちが、十家の祖先である。

「ファニシング家のステムなどはどうじゃ。見てきた限り、大分お気に入りなのじゃったが。」

「なっ。ステムとのことは誤解だ！お気に入りなどではない！

リオウも誤解するなよ。私はきちんとリオウのものだからな。」

そうは言っても顔を赤らめ、声を荒げられては説得力がない。

誤解するなと言われた利央もきよんとしている。

それを見たユニテルは、もう少し妬くなり、気になるといっよう

な態度をとってくれてもと呟いていた。

「誤解とは異なることを。先の舞踏会では二人で姿を消しておられたではないか。二人が庭で乳繰りあっておったという噂もありますぞ。」

「ちっ、ちちくっ！下品な言葉を言うてない。」ユニテルは益々顔を赤くする。

「まあ冗談はこれぐらいにするとしてじゃ。」

「冗談かいつとユニテルが切り返す。

「まあ、舞踏会を断ることができないとして……。男除けを考えるなら簡単じゃぞ。姫様が特定の男をパートナーとして連れて行けば良いのじゃ。」

男連れの女性を誘うような野暮はそうはおるまいて。」

なるほど名案じゃなとユニテルも相槌を打ちつつ、ちらりと利央に目をやる。「おっ、俺はだめだぞ。舞踏もできないし、礼儀も知らない。そんな場所にいけるわけないじゃないか。」

「そうだろうなとユニテルとセキバは頷いた。

「まあ、よしんば、利央を連れて行ったとしても、何の身分もない利央ではものの役に立たんじやろうな。」

男を連れて行くのが無理なら、そうじゃな。姫様よりも美しい、会場の注目となる美女を連れて行くとかはどうじゃ。

もっとも姫様よりも美人の女性となるとそうなかなか……。」「

ここで二人の視線が利央に向いた。

「おっ、俺？」

利央は自分の非凡な外見を呪った。

その後、利央はユニテルに押し倒され、女装することを渋々了承した。それほどうまく踊れなくてもある程度は踊れた方が良いというところで、こうして利央は今、舞踏の指導を受けているのだった。

**彼がお姫様になった理由（わけ）（後書き）**

少し暗い展開が続いたので、明るさ強化話し。

女装を賛美する変態小説ではありません。多分。

何かこのノリでどんどん脇道に逸れていきそつな気がする。

技術向上のため、評価して頂けると幸いです。

彼女の噂(前書き)

楽しんでってください

## 彼女の噂

一月後の舞踏会に向けて今日も舞踏の練習を行った利央は、夕食をとるべくユニテルの部屋に向かっていた。

ユニテルは普段、自室で食事をとっており、セキバと利央が同席するのが常だった。

ちなみに利央はユニテルの部屋に設けられている侍女たちが控えるための部屋に寝泊まりしている。セキバは宮殿内に部屋が用意されているようで、夜になるとどこかへ姿を消していた。

利央が廊下を歩いていると、後ろから声を掛けられた。最初、お嬢さんと呼んでいるので自分ではないと思っていたが、何度も声を掛けられ、そういえば今の自分はお嬢さんだったなと思い、利央は振り返った。

「何か、御用でしょうか？」

声を掛けた男性に振り向くと、そこには口髭をたくわえ、青い目をした、体格はがっしりとして無駄な肉が蓄えられていない鍛え上げられた体つきの男性、カミステルがいた。

「いや何。最近噂の麗しい女性のお姿をお見かけしたものですから、少し話しても思いましたね。」

（気付いてないのか？）

振り返った利央を見ても、カミステルは利央に気付いた様子はないかった。

「噂？一体どのような噂でしょうか。少し怖いですね。」自分の正体を明かして良いのかどうか判断がつかず、演技を続ける。

「おや、気付いてらっしゃらない？最近熱心に踊りの稽古を受けておられる女性がいて、その女性が美の女神も裸足で逃げ出すぐらいの美少女だという話ですよ。確かにあなたを相手には美の女神も裸足で逃げ出さざるをえないでしょうな。」カミステルは利央

の足の先から頭のとっぺんまでをじっくりと見つめた。

「そんな大げさな。美の女神に敵うものなどどこにもおりませんわ。」  
「またかと思う。ここ数日、カミステルのように利央に声をかけきた男性が何人かいたのだ。さらに言えば、もとの世界でもちよくちよく男に声をかけられていた利央としてはこの手の扱いになれていい。しかし続けて発せられたカミステルの言葉に利央は少し動揺した。」

「いやいや。こうしてお目にかかると決して大げさな噂とは思えませんが。あなたは美しい。」

こうして噂の真実を確かめるともう一つの噂も確かめたくありませんな。

あなたは他国から来た王女であるという噂です。

不躰な質問ですが、あなたは一体どこの誰なのですか。是非教えてください。」

この姿の自分がどこの誰かというのは考えていなかった。ユニテル達ともそう聞かれたときに、何と答えるかは打ち合わせていなかった。

眉をしかめ、困った表情を浮かべる利央にカミステルは声を掛ける。

「これは失礼。あなたを困らせているようですな。」

しかし困ったあなたもまた愛らしい。

此度の舞踏会にはあなたもご出席を？その時には是非私とも一曲お願いしたいものですな。」

カミステルの申し出に利央は頷くことしかできなかった。

食事を口にしながらユニテルは大笑いしていた。

「姫様、はしたないですぞ。」セキバが諫める。

「悪い、悪い。しかしカミステルに声をかけられるとは。しかも踊る約束をしたと？これが笑わずにいられるか。」なおもユニテルは笑い続けた。

「しかし、私たちの策はうまくいきそうだな。どこへ行っても謎の美少女の話で持ちきりだぞ。これで舞踏会での話題の中心は利央となることだろう。私も少しは楽になるというものだ。」

「まあリオウも心配するな。リオウの身分については、こちらで考えてある。ババ、首尾はどうだ？」ご機嫌な様子のユニテルはセキバに話しを向ける。

「こちらについてはうまく話しをつけましたぞ。」

「リオウ、これから女の姿のときは、リウ・ストテイルと名乗れば良い。ストテイル家の一人娘であるという設定じゃ。」

「セキバの説明では、ストテイル家はワイトダウに隣接している小さな領地をもつ子爵家であるとのことだった。」

「その領主は年老いた女性で、彼女は家を継いだ息子夫婦を事故で亡くし、孫もないため、一人で領地を切り盛りしており、中央の貴族たちとは付き合えない。」

「セキバは昔、彼女を助けたことがあり、その恩をつてに条件にびったりであった彼女に、利央を孫娘として欲しいと頼んだそうだ。」

「彼女はこれで家が取り潰しにならずにすむと喜んでいたという。」

「主は、ストテイル家の孫娘が行儀見習いも兼ねて、ユニテル様の身の回りの世話をすることになったということにしておれば良い。」

「セキバはそう話しを終えた。」

「リウ・ストテイルだなと口の中でその名を繰り返し、忘れないようにする利央。」

「ワイトダウに赴いた際には礼も兼ね、一度挨拶に赴かねばならぬな。」とユニテルも言う。

「にしてもカミステルか。やつは一体なんなのだろうな。」ユニテルが疑問を口にした。

「兄上たちと話しをしていた時、リオウの話しはでなかった。私は奴を兄上たちの間諜だと思っていたが、どうやら違うようだ。フリミールでの出来事が兄上たちに伝わっておれば、リオウのことは絶対問い質されていたに違いないからな。」

まあ知っていて、あえて問わなかったという可能性もあるが……」

「姫様。此度のワイトダウへは彼奴も連れて行くおつもりで？」

「そうするつもりだ。リオウのことを知っているのは、奴も含めて三人のみ。手元に置いておきたい。」ユニテルは応えた。

「それでは言っておかねばなりませんまい。姫様。

今彼奴の未来にはく大いなる栄光>が見えまする。」

大いなる栄光とは何だとユニテルが問う。

「それは分かりませぬ。フリミエールに行くまでは彼奴には暗い闇に囚われている姿しか見えなかつたのじゃが。

それが今は神々しい光を放つ姿に変わっている。じゃが、それが一体何を意味しているのかまではババには分かりませぬのじゃ。」

「いずれにせよ、私はババとリオウ以外に心を許すつもりはない。

カミステルについては、これからの奴の態度で判断を下すことにしよう。」ユニテルはカミステルについての判断材料を少しでも多く集めたいと判断を一時保留とした。

暫し、カミステルについて思索しているような素振りを見せていたが、不意に悪戯を思いついた時に浮かべる、吊り上った大きな瞳を細めた表情を利央に向けて言った。

「なんなら、リオウが色仕掛けで情報を集めてくれてもよいのだぞ。」

利央は丁寧にお断りしますと断固たる態度を示した。

## 彼女の噂（後書き）

明るさ強化話し第2弾でした。

うーん。もったときわどい展開にしたいなあと思ったり思わなかったり。

技術向上のため、評価して頂けると幸いです。

よろしく願います。

彼女の正体（前書き）

今回、少し短いです。

楽しんでってください。

## 彼女の正体

(何かもう…)

周りから固められている気がすると利央はため息をついた。

彼は今、剣を習うため、宮殿にある中庭の一つにいた。青々とした木々が目に眩しい。

ここで待つようセキバから言われ、利央はここにいた。

(それは良い。それは良かったんだが。)

利央は心の中で愚痴をこぼす。

(何でこの格好のままなんだ。)

利央は今淡い緑のワンピースを着ていた。

少なくとも帝都にいる間は女装しているようにとのセキバの指示だ。

彼女の説明では、すでに宮殿で噂になっている以上、男の姿をした(腹の立つことにセキバは<男装>をしたと言った)利央が歩き回るのは得策ではないとのことである。

理解できる説明ではある。行儀見習いに来た子爵家の孫娘が男の恰好をしていては、色々とまずがるかと利央でさえ分かる。しかし、しかしである。

(絶対、ユニテルとセキバはこの状況を楽しんでいるだけだと思っ  
んだよなあ。)

何度ついたか分からぬため息をまたつく利央であった。

「待たせたな。リオウ。」背後からセキバの声がした。

やっと来たかと利央が振り向くとそこにいたのはセキバではなかった。金色の髪を細くいくつかに編み上げた髪型をした幼女がいた。幼い子供特有のふっくらとした肌をしており、青い瞳は悪戯そうな光をたたえている。

彼女の背後には、白髪だろうか、銀色に輝く髪を短く刈り込み、

伸ばしている後ろ髪を三つ編みにしている男性がいた。引き締まった体躯に広い肩幅。両手には一本ずつ木剣をもっていた。およそ四十から五十歳くらいに見える。

セキバを待っていた利央は、現れた二人の人物の後ろの男性に言った。

「あの僕はセキバから言われて、剣を習うためにここに来ました。藤木利央と言います。」

「フジキリオウか。私はフラジルという。君に剣を教える教師を務めさせて頂く。これからよろしく頼む。」男性はそう名乗り、利央に手にした木剣を一振り渡した。

「こやつのはりオウと呼ぶがよいぞ。儂もそう呼んでおる。」幼女がフラジルに語りかける。その声はまるで老婆のようにしゃがれた声だ。

「…セキバ？」利央は幼女に向かって尋ねた。

「ん？そうじゃが。見て分からぬか？」

確かにセキバの声だった。利央は啞然とする。

「ああ、そうか。主に私の顔を見せるのは初めてだったのう。いつもはフードを被っておったからの。」そうじゃったそうじゃったと頷く幼女、もといセキバ。

「本当にセキバなのか。」尋ねる利央に、「本当にセキバじゃ。」と幼女は返した。なおも尋ねようとした利央に、

「さっさと稽古を始めたいのだが？」

世間話しを続けるのなら、俺はもう帰るぞ。「フラジルがつっけんどんに会話を割って入った。

「ああ、悪いフラジル。さっそく始めてくれ。」

何事もなかったかのように稽古を始めるよう促すセキバを利央は呆然と見つめていた。

## 彼女の正体（後書き）

ちよつと短いですが、きりがよいところで。

ここで区切らないとちよつと次が長くなりそうだったので。  
消化不良かもしれませんが、ご容赦下さい。

“彼”の剣（前書き）

楽しんでってください。

## “彼”の剣

「ではまず打ち合いから始めよう。全くの素人だとは聞いているが、お前の今の実力が知りたい。」

最初は好きに俺に打ち込んで来い。」

まだ、混乱から覚めない利央はフラジルの言葉に我に返る。

（好きに打ち込んで来いといわれてもな。）

利央は当然、剣など持ったこともなければ、振るったこともない。せいぜい体育の授業で剣道をやった程度だ。あとはテレビの時代劇での殺陣を見る程度だ。

（殺陣はあくまでも演劇だからな。やれと言われてもできないし。剣道も本格的にやった訳じゃないし。まあ見よう見まねか。）

そう考え、木剣を正眼に構え、フラジルに相對する。

フラジルは両手をだらりと下げたまま、構えもしない。

利央は声を上げ、フラジルに打ってかかった。

フラジルはそれをするりと躲すと、躲しざまに利央の頭を木剣で打つ。

「く、く、く。」痛みで声もでなかった。

「間を空けるな。次々と打ってこい。」フラジルの櫓が飛ぶ。

利央は奥歯を噛み締めると、フラジルを睨みつけた。

「良い眼だ。」にやりと笑うフラジル。

フラジルの表情にかつときた利央は闇雲に突進を繰り返した。

フラジルはそれらを全て躲し、頭、腕、胴と容赦なく一撃を加えていく。

「さあ、これでお前は何回死んだ？」笑いながらフラジルは言う。

「うるさい。ズブの素人を打ち据えて何が楽しい！」

剣の教師だというなら、教師らしく教えたらどうだ。「痛みを堪え利央はどなった。

「生憎、手取り足取り教えるほど、俺は親切じゃないからな。」

打たれなくなければ体で覚える。俺の一挙手一投足をよく見る。まずは俺のマネをするところから始めるんだ。」そう言ってフラジールは初めて剣を構えた。

「今度はこちらからいくぞ。」そう言ったかと思うと、すでに利央の目の前にフラジールの姿があった。

剣筋も見せずに頭部を打たれる。

<一方的にやられるのは趣味ではないな。>

一瞬、遠ざかった利央の意識の中で、その言葉は聞こえた。

<余が見本を見せてやろう。なに、一度、余が見本を見せれば、あとはお前の体が覚えてくれる。こんな輩には二度と負けんよ。>

利央の頭の中で、そんな言葉が響いたかと思うと自然と体が動いた。

フラジールは驚きの表情を浮かべる。

利央が動いたかと思うと、その姿が一瞬消えたのだ。

側面から気配を感じ、辛うじて、利央の剣を躲す。

(何だ、急に。まるで別人のようだ。それにこの気配。尋常じゃない達人の気配だ。)

利央の変貌ぶりに動揺を隠せなかった。

利央は、だらりと両手を下げ、上体を前かがみに倒している。大きな瞳はフラジールを見つめていた。

その姿は獲物に最後の止めを刺す獣のように見えた。

利央がふつと軽く息を吐いたかと思つた次の瞬間、フラジールの胸が、利央の木剣で薙がれた。そして、頭部に強烈に木剣を振り下ろされた。

「さあ、これでお前は何回死んだ？」

利央がにやりと笑った。

気を失つたフラジールを見下ろしながら、利央は困惑していた。

(なんだこれは。急に声が聞こえたかと思うと体が軽くなって……。

)

まるで体が誰かに乗っ取られたようだった。自分にあんな動きができる訳がない。そう思った。

<いや、できるぞ。もうこの体はさっきの動きを覚えた。これでお前はその辺の輩には負けない強さをもった。>  
頭の中でまた声が聞こえた。

(何だ、この声は。僕はおかしくなったのか。)

<お前はおかしくなっておらんよ。余はお前の中に存在している。>

(お前は一体誰なんだ。)

利央の問いに声は応えることはなかった。

「ようもまあ。」

セキバの呆れた声が聞こえた。

セキバはその小さな太ももにフラジルの頭をのせていた。膝枕だ。

「お前は時折、信じられぬことをするのお。」

フリミエールでもそうじゃった。さっきの動きはフリミエールでの動きとそっくりじゃったぞ。」

セキバの言葉に利央は、はっとする。

「セキバ。教えてくれ。」

フリミエールで僕は一体何をしたんだ。

それに、この声は一体何なんだ。」必至の形相となった利央が問う。

「声じゃと?」

「もしか、お主……。いや、待て。」

リオウ。お主には僕の知っておることは話してやる。じゃが、今は待て。」

その話しは姫様もおるところでじゃ。」

セキバに言われ、利央は焦る気持ちを抑えたが、「本当に教えてくれるんだね。」と念を押した。

「じゃから、待てと言っておる。」

今はこの怪我人を介抱せねばなるまい。

焦る気持ちは分かるが、今は儂に旦那を労わる時間をくれ。」セキバがそう口にする。

利央は目の前で気を失っている人に気を留めず、自分のことだけを考えていた自分を恥じた。が、何かが引つ掛かった。

「旦那？旦那って、この人が？」

「そうじゃ。フラジルは儂の夫じゃ。」

セキバは事も無げにそう言った。

“彼”の剣（後書き）

楽しんで頂けましたか？

## 竜憑きたち（前書き）

説明にかたよっているような気もしますが。

楽しんで読んで下さい。

## 竜憑きたち

夜の帳が下り、昼の暑さも幾分か和らぎ、静寂があたりを包んでいた。

街の人々も寝静まり、時折、酔っ払いたちが上げる喧騒が聞こえる程度だ。

無論、夜が齎す静寂は宮殿でも例外ではなく、歩哨の姿を見かける程度だ。しかし、宮殿の一室、ユニテルの部屋では四人の男女が密談を交わしていた。

机に置かれた蝋燭があたりを照らす火に自身の身を焦がせていた。その火を取り囲み、四人の男女が座っている。

そんな中、利央は正面に座っている男女にツツコミを入れるべきか悩んでいた。

利央の正面に座っている男女　セキバとフラジルだ。セキバはフラジルの膝の上に座り、背後からフラジルに抱き締められていた。彼女は愛おしそうに彼の腕を撫でる。

（普通は、小さな子を抱きしめる微笑ましい光景の筈なのに……。）  
二人が醸し出す雰囲気が、利央に別のものを感じさせていた。

（犯罪くさい。犯罪のにおいがする。）  
ツツコミを入れるべきか悩んでいたものは、もう一つあった。

ユニテルだ。

彼女は先ほどから羨ましそうにセキバとフラジルを見やり、ちらちらと利央に目を向ける。

利央は、一つ咳払いを言った。

「やらないよ。」

ユニテルは目と口を大きく開け、顔を真っ赤にした。

「べ、別にうらやましくなんかないぞ。ただちよっと、私もりオウの膝に座りたいなあと思ったり、思わなかったり……。」「次第に声

を小さくする。

彼女はそんな自身の未練を振り払うかのように、声を大にして言う。

「それよりも、リオウのことだ。こんな夜更けにわざわざ集まったのはそれを話すためだろう。ババ、いつまでも惚けてないで、さつさと話を始めないか。」

「やれやれじゃ。姫様は久しぶりにあつた夫婦に愛を確かめ合う時間も与えないつもりかえ。」

そう言うセキバにフラジルが声をかける。

「セキバ。若い二人をからかうんじゃない。今はそのリオウのことだ。」

愛なら後でたっぷりと確かめ合おう。」

その言葉に利央とユニテルは赤面した。

若い二人をからかっているのはお前じゃないか、利央はそう思った。

「主は覚えていないと言っておるが……、」

セキバはフリミエールでの利央について話しをした。

利央はセキバの話しを聞き、「僕がそんなことを……。」「とセキバの言葉が信じられないと述べた。

「全て本当のことじゃ。主はあそこで、賊の全てを殺したのじゃ。」「冷酷にセキバが告げた。

（僕が人を殺した？）

利央はその話しをとて信じられなかった。

「とはいえ、あの時の主の姿は、先ほど、フラジルに相對していた時のように、別人のようじゃった。」

主はさつき、この声は一体何なのだと叫んだな？」

利央は頷く。

「僕にはその声に心当たりがあるのじゃ。」

それは一体なんだ？と話しを聞きつづけた利央は目で訴えた。

「竜憑きじゃ。」セキバは答える。

「りゆうつき？」

「さよう。竜がその身に宿った者のことをそう呼ぶ。

竜憑きが現れると、国が乱れるといわれておる。

国が乱れたから竜憑きが現れるのか、竜憑きが現れたから国が乱れるのかは分からぬがの。」畏敬の表情を浮かべ、セキバは話す。

見れば、フラジルもセキバも同様の表情をしていた。まるで竜憑きについて話すこと自体が恐れ多いとでもいうかのように。

「この大陸の者たちは皆、竜憑きを恐れておる。幼い頃からその恐ろしさをよく言い聞かされて育っておるからの。」

竜憑きの恐ろしさを伝える伝説（この大陸のものにとっては史実）についてセキバは話した。

かつてこの大陸は大小多くの国々に分かれ大陸の覇権を争っていた。

そこに一人の人物が現れた。名をドライグ・サミスタンという。

彼は、覇権を争っていた国々のある国の皇子であったが、竜を殺したことでその身に竜の力を宿したと称していた。それが真実であったかどうかは分からない。

彼は強大な力をもった軍を組織した。

その軍は次々と他の国を支配下に置き、ついには大陸を支配するに至った。

彼が組織した軍の兵たちは、通常考えられないほどの強さを誇り、竜軍と恐れられた。

一説にはその軍は数十人であったとされる。彼らは皆、竜の力を宿したとされ、一騎で千の軍に相当する強さを誇っていた。

竜憑きとはドライグとその数十人の竜の力を宿した者たちを指して呼ばれた称号であった。

ドライグはそうして大陸の統一を果たした。しかし、彼の栄華は長く続かなかった。

<大侵攻>が起こったのだ。

大侵攻は闇の王自らが率いる壮絶なものであった。統一を果たした国の三分の一の国民が亡くなったといわれている。

ドライグは竜憑きたちを率い、また、大陸の全ての者たちを率い、闇の王に対抗した。

彼らはよく戦い、ついには黄泉に闇の王を追い詰めるに至ったがそこで悲劇が起こった。

竜憑きの一人が裏切ったのだ。

ドライグは怒り狂い、裏切り者を殺した。しかし、一度芽生えた猜疑の種は彼の心から取り除かれることなく、彼は疑いの目を彼に従う全ての竜憑きに向けた。

そこから竜憑きたち同胞の血みどろの争いが生じたのだ。竜憑きたちはお互いの身を喰らいあった。その様は、蛇が自分の尾を喰らう様に似ていた。

彼らの争いは、大侵攻に匹敵する被害を大陸に齎すこととなったという。

そして最後にはドライグだけが残った。

彼は竜憑きを全て屠った後、一人で黄泉に向かったといわれている。

伝説では、闇の王と戦い、共に倒れたとされていた。

竜憑きは、その強さ、大陸統一の栄光を讃えられるとともに大陸を破滅の淵へ追いやった大侵攻と同様に、忌み嫌われる存在として語られ続けたのであった。

## 竜憑きたち（後書き）

先日、初めて評価を頂きました。

とても嬉しいです。

評価して下さいった方ありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9061y/>

---

彼女のために僕ができること

2011年12月11日10時47分発行